

<p>テーマ</p>	<p>授業 UD における視覚化の技法 ～デザインのアプローチによる認知負荷の軽減～</p>
<p>発表者 (所属)</p>	<p>池田 努 (山形県立庄内総合高等学校 通信制の課程)</p>
<p>【発表概要】</p> <p>伊藤良子 (2015) は、授業 UD のアプローチは「特別支援教育の専門性がベース」になっているものと「教科教育の専門性がベース」になっているものとの 2 つの方向性があることを指摘している。</p> <p>上記のいずれのアプローチも、授業や学習環境の「設計 (デザイン)」としての側面が強く、本来デザインがもつ視認性 (見やすく)、可読性 (読みやすく)、判読性 (わかりやすく) といった「視覚的効果 (情報デザイン)」の側面からのアプローチはあまり語られてこなかったのではないかと推察する。確かに、授業 UD 関連の書籍には「焦点化」、「視覚化」、「共有化」を重要な要件として示しているものもある。しかし、そこでの「視覚化」は、説明や指示などを板書や絵や写真、映像などによって視覚的に示し、学習内容をイメージしやすくするといった効果についての解説に留まっているものが多く、視覚化をどういったマインド、プロセス、テクニックで実施すればよいかをデザインの視点から具体的に解説しているものはほとんどない。</p> <p>米国の CAST (Center for Applied Special Technology) における『学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン』3 原則においても、最初に記載しているのが「提示のための多様な方法の提供」についてである。そこには「文字、画像、グラフ、表、その他視覚的コンテンツの大きさ」、「文字や画像と背景とのコントラスト」、「情報や強調に用いる色」、「視覚的な要素その他のレイアウト」、「印刷教材用のフォント」など視覚的表現について具体的に示している。このことから「教材や情報の提示方法」は、授業 UD の重要な要素であることがわかる。</p> <p>今回の口頭発表では、授業 UD における「視覚化」の具体的方法を「視覚デザイン」や「情報デザイン」の視点からのアプローチとその効果について提示したい。授業での ICT 機器活用が推奨されている現在、授業 UD の視点から PC 画面 (板書) や提示資料の「視認性」、「可読性」、「判読性」をどのように確保するべきかをともに考えていきたい。</p>	